

理系の視点からみた「考古学」の論争点
新井宏

「論争」は人々を惹きつける。特に争点がきわめて明快であって、百家争鳴の状態にあるテーマほど面白い。政治論争でさえ郵政問題を「抵抗勢力か否か」と単純化してせまれば国民は反応する。「年金問題」も同様である。ましてやロマン溢れる考古学や古代史の論争は、時には関連ニュースが新聞のトップを飾ったとしても不思議ではない。

「邪馬台国はどこにあったか」。

このテーマひとつだけでも、数多くのアマチュアが人生を楽しませてもらっている。専門学者の多くが「大和説」なのに、アマチュア側では「九州説」が優勢で、国民投票をすれば「九州説」が勝つかも知れない。

関連して「三角縁神獣鏡は魏鏡か国産鏡か」も面白い。最近では、魏鏡説が多い専門家の中にあっても、「中国からは一枚もでない」という重い事実から国産説を唱える学者も増えている。その議論の帰趨によっては「邪馬台国論争」にも大きな影響を与えるが、ここでもプロ対アマの構図が見てとれる。

「弥生時代は五百年遡るのか」というテーマも興味尽きない。炭素十四法や年輪年代法など科学的な手法が描く世界は、はたして旧来学説を葬り去ることができるだろうか。考古学の定説とはそんなひ弱なものだったのか。

また、「古墳はどんなものさしで造られたか」という尺度問題も「ひとつの古墳にひとつの尺度」と揶揄されるほど百家争鳴の論争テーマである。

そもそも、わが国の古代史分野では「法隆寺は再建か非再建か」の論争が最もエキサイティングであった。その際の主要な論

点として、法隆寺が高麗尺で作られたという尺度論争があったので、その伝統を引き継いだのかも知れない。

その他にも、金属考古学の世界では「弥生時代には製鉄が本当に行われなかったか」とか「古代日本に間接製鉄法があったか」あるいははたして「古代日本では硫化銅の製錬が行なわれたか」などの論争が繰り返されている。

考古学や古代史の世界では論争の種は尽きることがない。

筆者は、四十年間、鉄鋼会社で生産管理や研究開発に携わってきたが、それと同時に趣味として東アジアの古代史や考古学研究を続けてきた。今、韓国の国立慶尚大学で招聘教授として金属工学を教えながら考古学等の研究をしているのも、間違いなくその延長線上のことである。

継続は力である。最近になって相次いで、永年の研究成果を学説として纏め上げ学術誌に発表した。ありがたいことに、その内容を新聞でも紹介してくれているので、ご存知の方もおいでだろう。実は、そのテーマの多くが、論争としての条件を兼ね備えた上記の三角縁神獣鏡問題、弥生時代遡上問題、古代尺度問題、あるいは金属考古学の諸問題と大きく関連している。要は、野次馬的な好奇心に満ちていたのである。

筆者はこのような内容を持つ『理系の視点からみた「考古学」の論争点』という本をまもなく(八月中旬)に大和書房より上梓する。その中では、古代の日本と朝鮮半島で共通に使われていた「古韓尺」についても熱く語っている。計量関係の方々にも、読んでいただけたら望外の幸せである。

(韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)